

―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

万葉の川心 第14回

川崎市立木月小学校教諭 船田 園子

鳳至郡の饒石川を渡りし時に作る歌

妹に逢はず久しくなりぬ

饒石川清き瀬ごとく水占はへてな

(巻第十七 四〇二八番歌)

どうして、しあわせな気持ちのままではられないのだろう。何かにかかって突き進んでいた時には、考えもしなかったことなのに、ふと、足を止めたり、スピードをゆるめると、とたんに「不安」というぬばたまの黒い闇が忍び込んでくる。悩みはしないけれど、惑っている。そういえば、久しく逢わないあの人はどうしているだろうか。旅先の小さな神社で足を止めた。大きな銀杏の木に見下ろされながら石段をゆつくり上り、お社につくと、「おみくじ」の貼紙が目に入った。「見えない不安を消すための、小さなきっかけになるかもしれない。」百円玉をおいて、六角杉の木箱を振った。

鳳至郡とは、能登半島の中央部にあたり、石川県羽咋郡の北、珠洲市・輪島市の南に位置する。饒石川は能登半島の西岸に注ぐ川で、現在の仁岸川である。その川に架かる「つるぎ大橋」のたもとに、この歌の碑が立てられている。大伴家持は、珠洲郡から船で旅立つ歌を残していることから、さらに北上して奥能登までも巡察し、困難な旅を続けたと思われる。旅の途中、饒石川を渡るとき、遠く離れた妻を恋しく思っこの歌を詠んでいる。「妻に逢わずに久しく時が経った。饒石川の清らかな瀬ごとに、水占をしてみよう。いつ

になったら逢えるのだろうか。」

「水占」とは、他例がないので詳しい方法はわかっていないが、その後の「はへて」という語を「延へて」と解釈し、縄を使った占いであろう(伴信友、正卜考)と考えられている。川に縄を張って流れ寄る物の種類や数で占う方法や、あるいは、縄を川に流して滞らずに流れるかどうかによって吉凶を判断する方法などがあると言われる。

また、古語の「うら」には「心」の意味がある。現在でも「心悲しい」「心恋しい」など、言葉の頭につくと、「何となく」「心のうち」といった意味合いが含まれるが、うらないの「うら」は「神の心(神意)」である。古代より、生活においても、また、行政上の指針としても「占」は重要視されてきた。太占、夢占、足占、石占、道占、辻占、夕占など、さまざまな民族的な方法があり、家持も、饒石川で出合ったこの地方独特の占いが珍しく、歌に詠んだのではないだろうかと思われる。

「八十六番。」そう、巫女さんに告げて「うら」をいただく。自然に顔がほころんだ。「待ち人来たる——大吉」見上げると、銀杏の間から久方の光がふりそそいでいる。

